

れた際、物語の主人公・清姫のイメージは、悪しき女性から聖なる女性へとイメージチェンジがなされている。では、この物語において、主人公のイメージチェンジすることに成功した要因は何なのか。また、当時の観客はどのような主人公のイメージを求めていたのか。本発表では、当時から現代にかけての日本人のもつ宗教性や思想の側面について、聖なる女性に焦点をあて考察していく。

紀州道成寺には、釣鐘にまつわる古くから伝わる有名な伝説があった。それは、時は永長六年(九二八年)のこと。紀州国日高郡に住む真那古庄司の娘の清姫は、庄司の家に一夜の宿を借りた熊野詣の若い僧の安珍に思いを寄せる。そして、二人は夫婦になる約束を交わすが、僧は立ち去ってしまう。その裏切りを知った清姫は、嫉妬のあまり、ついには蛇体となって逃げた僧の後を追ひ、道成寺の釣鐘の中に隠れた恋しい僧を鐘ごと焼きつくし、自らも息絶えてしまう。その後、二人は畜生道に落ちたが、高貴な僧の写経によって救われ、別々に天へと昇った。法華経とは有り難いものである。これが道成寺説話である。この伝説に基づいて、その後展開された物語が、能の「道成寺」と歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」である。清姫のために焼失していた紀州道成寺の釣鐘が、正平十四年(一三五九年)に再興した。そこへ清姫の亡霊が、白拍子花子(中世の女芸人)に扮して現われ、鐘供養の妨害をしたという物語である。すなわち、清姫は、鐘への恨みをはらすべく、鐘供養が行われる日に、紀州道成寺を再び訪れ、再興された鐘を崇った物語、「道成寺」である。

能と歌舞伎で共通して見られるのは、第一に、清姫が僧の禁欲生活を脅かす存在の女性として描かれており、第二に、女性の普遍的な苦しみとしての嫉妬が鐘を媒体に表現されている。そして、第三に、恋に一途で健気な女性として描かれているという点である。しかし、共通した物語であっても、能と歌舞伎を比較した場合、物語、舞台構造、衣裳によって観客に与える物語の主人公のイメージは大きく変化する。結論として、歌舞伎だからこそ、清姫を聖なる女性として描くことに成功したのである。なぜなら、能は抽象的表現であるのに対し、歌舞伎は能の抽象的な要素を含みつつ、写実的表現だからである。この「京鹿子娘道成寺」に即して言う限りでは、物語の主人公・清姫の表現は、鐘への執念だけに止まらない。女・蛇・聖が、女性として生きることへの情念として繋がっているのである。それは、歌舞伎舞踊によって、聖なる女性の表現が更に強調される。そこで観客は、本当の自分の姿を主人公の中に投影し、想像の世界に自身を解放しているのである。

宗教における「女」の伝統

——天理教婦人会についての一考察——

堀内 みどり

「一時女、婦人会として始め掛け。これ人間が始め掛けたのやない。神が始めさしたのや」(明治三二年三月二五日)との神意(「おさしづ」：明治二〇年から四〇年にかけて、本席飯降伊

蔵によって神のことが伝えられた)により、明治四三年一月二八日に創設された天理教婦人会は、創立百周年記念第九二回総会および記念行事を主催した。記念総会に向け婦人会では三年前から活動を展開。五月二日付『天理時報』は、『道の台』世紀を刻む」と題し、「一昨年『創立百周年委員長講習会』を支部(直属教会)ごとに開いたほか、昨年『創立百周年婦人会員決起の集い』を国内外三七五会場で開催するなど、支部・教区が総力を挙げて会活動に取り組んできた。総会当日は過去最多となる一二万人余りの会員が親里に参集。中山はるえ婦人会長のあいさつに続いてお言葉に立たれた真柱様は『思いを新たに道の台として頼もしい歩みを』と述べられた」と、当日の様子を伝えている。

天理教は中山みきという女性を教祖とし、教祖を「雛型」とする信仰的在り方を日常生活とし、多くの女性布教師をも輩出させてきた。そうした中、天理教婦人会は神意によって創設を促され、このことは天理教婦人会自身、大きな特徴と自負している。中山はるえ婦人会長は、総会の挨拶で「その道を受け継ぐ私たちが百周年を迎えるに当たったの思案は、元に返り、本来あるべき姿を目指すことだった」と述べている。

百年という時間を経て、天理教婦人会は「(女は道の)台」を自らの指標とした。しかし、その内実において、どのような「宗教における『女』の伝統」を創ろうとしてきたのだろうかを考えてみたいというのが本発表の根底にある。したがって、天理教婦人会がどのような活動を推進してきたのか、どのような言説を用いたのか、時代とどう関わったのか、女性信者たち

はどう生きてきたのか等々が検討されなければならない。ここでは、まず「元に返り、本来あるべき姿を目指す」ために、主に「おさしづ」の神意について考えてみたいと思う。

天理教婦人会創設の端緒となったのは、明治三十二年三月二五日「増野いと身上願」の「おさしづ」である。そこでは、「事情はさあ女の道がある。皆惣計女の道あるなれど、女の道に男女とは言わん。この道どうも分からん。そこでよう聞き分け。惣計の中談示の台に出す。」と言われ、明治三十一年三月二十六日「前日増野いとおさしづより、婦人会の事に付おさしづありしにより、以後の筋道心得事情申し立て願」では、「元は元だけのこう無くばなろうまい。……元々始めたぢばという。皆んな治めにやらん。……男女の隔て無く、一時に心澄み切りて通れば、男女の区別は無い。……これから話、男女の隔て無い。よう始めた道聞き分け。この道始めたは男か女か。これから悟ればどんな事も分かる。……入り込み大切々々教の台とする。不当の扱いは台と出けん。……なれど、運び落ちある。そこで、婦人会の台から、……婦人会たすけ一条の道、」と語られる。

これらから、「女の道」は「教祖の道(天理教)」のことを指し、これを信仰し実践するのに男女の隔てはないが、このことが「この道どうも分からん」ので、「婦人会の台から」示そうとしたのではないかと思われる。